

清代八股文における破題・承題の作成法について (5)

滝 野 邦 雄

(3) 承題の解説と用例

(i) 『斯文規範』

王茂修（字は允徳。直隸博陵の人）の『斯文規範』（康熙五十九年（一七二〇）自序）は、承題をつぎのように説明する。

破承（承題）とは、破題を承接するなり。既に破題に^{つらな}屬り承接すれば、即ち當に承接有るべし、^と破くに自から破き、而して承くるに自から承く可からず。〔破題が〕上句もて題面を破き、下句もて章旨に入る、或いは〔破題が〕上句もて題面を破き、下句もて題意を破く者なれば、〔その〕^{ママ}破承（承題）の開口（書き方）は、當に破〔題〕中の首句を承け、先ず題面を説明し、承尾に至りて始めて破〔題〕中の次句を承け章旨と題意とに説き入るべし。如し〔破題が〕上句もて章旨に入り、下句もて題面を破く、或いは〔破題が〕上句もて題意を破き、下句もて題面を破く者なれば、〔その〕^{ママ}破承（承題）の開口（書き方）は、當に破〔題〕中の次句を承け、先ず題面を説明し、承尾に至りて始めて破〔題〕中の首句を承け章旨と題意とに説き入るべし。〔そして破題が〕順破なれば則ち當に〔承題は〕逆承なるべし、逆破なれば則ち當に順承なるべし、反破なれば則ち當に正承なるべし、正破なれば則ち當に反承なるべし、暗破なれば則ち當に明承にすべきが若きに至る。其の要緊の處は當に明白●（一字不明：以下同じ）當なるべし。沉悶冗長なる可からず（『斯文規範』卷之三・七葉～八葉・「論破承」条）。

破承（承題）とは、破題を承けて接するものである。破題に連なって承接するものなので、承けて接すべきなのである。勝手に題目を破いたり承けたりすべきではない。破題が上句で題目の題面を破き、下句で題目の章旨に入るもの、あるいは破題が上句で題目の題面を破き、下句で題目の題意を破くものであれば、その破承（承題）の開口（書き方）は、破題の上句を承けて題面を説明し、末句になって始めて破題の下句を承けて章旨と題意とに説き入るべきである。もしも、破題が上句で章旨に入り、下句で題面を破いたり、あるいは破題が上句で題意を破いて、下句で題面を破くようなものであれば、その破承（承題）の開口（書き方）は、破題の下句を承けて題面を説明し、末句になって始めて破題の上句を承けて章旨と題意とに説き入るべきである。破題が順破であれば承題は逆承で承け、逆破であれば順承で承け、反破であれば正承で承け、正破であれば反承で承け、暗破であれば明承で承ける。その要点ははっきりさせることである。ぐずぐずと長ったらしくすべきではない、という。

なお、『斯文規範』では用例はあげられてはいない。

(ii) 『初學玉玲瓏』

徐瑄の『初學玉玲瓏』(乾隆十五年〔一七五〇〕序)は、承題について、つぎのように説明する。

承とは、接なり。破〔題〕は二句に止まり、未だ能く題〔目〕の義を盡す能わず。故に破題に接して以て之を言う。其の法 三四句もて即ち止む。長きも五六句に過ぎず。正承・反承の別有り・蓋し正破ならば則ち反承し、反破ならば則ち正承す。亦た順破ならば則ち倒承し、倒破ならば則ち順承する者有り。總じて題字を拆開し、破題の未だ明らかならざるの意を申明するを以て佳しと爲す。大抵は首句に反筆¹⁾を用いること多く、次は主に題面に還り、末句は或いは題〔目〕に就きて收む、或いは下文を吸(含ませる)、或いは上意を我(找:補足)す、或いは正旨を照らす。最も「平頭」・「平(並)脚」を忌く。〔つまり〕承〔題〕の首句と破〔題〕の首句と相い似るは之を「平頭」と謂う。〔承題の〕末句と破〔題〕の次句と相い似るは之を「並脚」と謂う。皆な留意せざる可からざるなり。○承題は三四句と雖も、實に起承轉合の妙を具う。一篇の大局 已に此に定まる。所謂ゆる一破〔題〕もて大意を見る可き者 此れなり。○起頭には「夫」字・「甚矣」字・「蓋」字を用う。轉じて「若」字・「然」字も用う可し。煞脚(末尾)には「乎」字・「哉」字・「耳」字・「耶」字を用う。「也哉」・「者哉」・「焉」・「耳」・「乎」・「哉」・「者」・「耶」は、文氣を視て之を用う可し。必ずしも拘泥せず(『初學玉玲瓏』不分卷・十一葉・「承題」条)。

①夫:起語にして指す所有の辭なり。「夫顓臾」(『論語』季氏)・「夫明堂者」(『孟子』梁惠王下)の類の如きなり。又た另に起こすの辭なり。「夫滕、壤地偏小」(『孟子』滕文公上)・「夫物之不齊」(『孟子』滕文公上)の類の如きなり(『舉業辨字』起語辭第一・一葉・「夫」条)。

④起語:「起語とは、此れより前に文無くして、虚字を以て之を起こすなり。亦た前文の已に畢りて虚字を以て另に起こすこと有る者も皆な起語なり(『舉業辨字』起語辭第一・一葉・「起語」条)。

1) 「反筆」について、『初學題類文法合編』は、

〔反筆〕凡そ題に正面有れば、必ず反面有り。反面より發揮(論述・展開)すれば、則ち正面 愈いよ醒む。惟だ反面〔題目の〕上下の文に在る者は、此の法を用うる可からず(光緒五年新鐫『初學題類文法合編』下卷・一葉・「反筆」条)。

と説明する。

また、唐彪の『讀書作文譜』では、董其昌(字は玄宰、号は思白など、諡は文敏。江蘇華亭の人。嘉靖三十四年(一五五五)～崇禎九年(一六三六)。萬曆十七年己丑科(一五八九)の進士)の説明を引用して次のように解説している。

〔反正〕董思白 曰く、反正は乃ち文の大機關(最重要点)にして、知らざる可からざるなり。且そも『論語』の中、夫子の管仲を論ずるが如きは、若し之を正言すれば、則ち「管氏 禮を知らざれば、何等明らかにし盡さん」と曰うに、却って又た「管氏にして禮を知らば、孰か禮を知らざらん」(『論語』八佾)と曰う。子賤(宓子齊)の賢を尊びて、友を取るは、若し之を正言すれば、只だ宜しく「魯 君子多し、故に取る所有りて以て其の徳を成す」と曰うべきなるも、却って「魯 君子無かりせば、斯れ焉くにか斯れを取らん」(『論語』公冶長)と曰う。此れ皆な反語なり。惟れ反にして、文 斯れ暢(よどみが無い)なり、と(『讀書作文譜』卷之七・六葉・「反正」条)。

- ②蓋: 起語にして原^{たず}める所有るの辭なり。將に之を推原するを欲せんとするなり。「蓋有不知而作之者」(『論語』述而)・「蓋世上嘗有不葬其親者」(『孟子』滕文公上)の類の如きなり(『舉業辨字』起語辭第一・一葉・「蓋」条)。
- ③若: 定まらずの辭なり。「若於齊」(『孟子』公孫丑下)・「若藥不瞑眩」(『孟子』滕文公上)の類の如きなり。又た「如」なり。「若時雨降」(『孟子』梁惠王下)・「若火之始然」(『孟子』公孫丑下)の類の如きなり(『舉業辨字』轉語辭第三・十九葉・「若」条)。
- ④轉語: 凡そ文字は從りて直行する者無し。要は轉々相い生ずるに在り、而して後に能く一篇の局を成す。其の間 或いは反轉す、或いは正轉す、或いは深一步轉す。皆な須らく一二の虚字を用いて之を領^{おさ}むべし(『舉業辨字』轉語辭第三・十三葉・「轉語」条)。
- ④然: 前文に反して另^{べつ}に發するの辭なり。或いは前に反し後に正す、或いは前に正し後に反す。凡そ文の大いに轉ずるの處は皆な之を用う。「然終於此而已矣」(『孟子』萬章下)の類の如きなり(『舉業辨字』轉語辭第三・十三葉・「然」条)。
- ⑤乎: 疑いて未だ定まらずの辭なり。「商量」の意有り。「咏歎」の意有り。「辨駁」の意有り。俱に上文に隨いて之を用う。「商量」は、「夫子為衛君乎」(『論語』述而)・「大宰知我乎」(『論語』子罕)・「賢者亦樂此乎」(『孟子』梁惠王上)の類の如し。「咏歎」は、「不其然乎」(『論語』泰伯)・「學者其可不盡乎」(『中庸』三十三章の朱注・『論語』學而「曾子曰、吾日三省吾身…」条の朱注)の類の如し。「辨駁」は、「君子亦黨乎」(『論語』述而)・「其何傷於日月乎」(『論語』子張)・「●●乎」の類の如し(『舉業辨字』歇語辭第七・三十五葉・「乎」条)。
- ⑥哉: 畧は「乎」字と近似す。然れども「乎」字は軽く揚がり、「哉」字は直捷(直接的)なり。「乎」字は多く疑う。「哉」字は却って「驚き怪しむ」の意・「嗟歎」の意・「贊揚」の意・「自得」の意有り。凡そ文の之に反せんと欲する・之を駁せんと欲すれば、則ち此れを用う。「驚き怪しむ」は、「是誠何心哉」(『孟子』梁惠王上)・「不仁者可與言哉」(『孟子』離婁上)の類の如し。「嗟歎」は、「管仲之器小哉」(『論語』八佾)・「吾何以親之哉」(『論語』八佾)の類の如し。「贊揚」は、「郁々乎文哉」(『論語』八佾)・「有心哉」(『論語』憲問)・「豈曰小補之哉」(『孟子』盡心上)の類の如し。「自得」は、「舍豈能為必勝哉」(『孟子』公孫丑上)・「吾何為不豫哉」(『孟子』公孫丑下)・「豈不綽々然有餘裕哉」(『孟子』公孫丑下)の類の如し(『舉業辨字』歇語辭第七・三十四葉・「哉」条)。
- ⑦耳: 「勢いに順いて軽く落すの詞なり。易きに至り難きこと無し」の意有り。其の意 遠くして、韻 長し。文を轉ずる中に往々として之を用う。「人病不求耳」(『孟子』告子下)・「堯・舜與人同耳」(『孟子』離婁下)の類の如きなり(『舉業辨字』歇語辭第七・三十三葉・「耳」条)。
- ⑧歇語: 歇語は乃ち文字の歇足の處なり。宜しく用いるべき所の者なり。其の義に虚歇・實歇・順歇・逆歇の同じからざる有り。須らく其の文勢に隨いて斟酌して之を用うべし(『舉業辨字』歇語辭第七・三十二葉・「歇語」条)。
- ⑧耶: 亦た疑うの辭なり。「乎」・「哉」字と相い類す。但し微かに婉轉(婉曲で含蓄ある)たる詰問の意を帶ぶ。「乎」・「哉」字に較べて趣味(味わい) 悠長なり(『舉業辨字』歇語辭第七・三十五葉・「耶」条)。
- ⑨也哉: 搖曳咏歎の辭なり。其の音 甚だ長し(『舉業辨字』歇語辭第七・三十五葉・「也哉」条)。

⑩者哉：指す所有りて咏歎するの辭なり（『舉業辨字』歇語辭第七・三十五葉・「者哉」条）。

⑪焉：「也」字と同じく亦た平落の辭なり。但だ「也」字に較べて韻 畧は輕清にして、意 畧は虛活なり。以て「也」字は平にして下に就き、「焉」字は平にして上に就く。蓋し少々と擬筆するの住法なり（『舉業辨字』歇語辭第七・三十三葉・「焉」条）。

⑫者：物に即して襯墊するの辭なり。凡そ「人を指す」・「物を指す」・「事を指す」・「理を指す」には必ず此れを用いて之を襯す。「人を指す」は「從我於陳蔡者」（『論語』先進）・「有荷簣而過孔氏之門者」（『論語』憲問）・「夫召我者」（『論語』陽貨）の類の如し。「物を指す」は「五穀者」（『孟子』告子上）・「為叢毆爵者」（『孟子』離婁上）の類の如し。「事を指す」は「予所否者」（『論語』雍也）・「屏氣似不息者」（『論語』鄉黨）の類の如し。「理を指す」は「我非生而知之者」（『論語』述而）・「其有不合者」（『孟子』離婁下）・「所欲有甚於生者」（『孟子』告子上）の類の如し（『舉業辨字』歇語辭第七・三十三葉～三十四葉・「者」条）。

承題の「承」とは、「接」の意味である。破題は二句でしかないため、題目の意味をすべて説きつくすことはできない。したがって、破題に接して説明する。承題の部分は、三四句でとどめる。長くても五六句にする。正承・反承などの区別がある。破題が正破だったら反承でうけ、反破だったら正承でうける。また順破だったら倒承でうけ、倒破であれば順承でうける。総じて題目の字面を拆開（分割）して、破題ではまだ明らかにできなかった意味を説き明かしたものを佳しとする。だいたい第一句目に反筆を用い、二句目は題面にもどり、末句では題目にもとづいて収めるか、題目として出題されていない題目より下の部分を含ませて書くか、題目として出題されていない題目より上の部分を補足して書くか、主旨を参照して書く。承題の首句と破題の首句と同じようになってしまう「平頭」と、承題の末句と破題の二句目とが同じようになってしまう「並脚」は避ける。こうしたことは留意しなければならない。承題は、三四句ではあるけれども、そこに起承轉合の配合を具える。文の大勢はここに決まってしまうからである。いわゆる「破題でその大意を見ることができる」というものが此れである。○一句目には「夫」字・「甚矣」字・「蓋」字を用う。轉じて「若」字・「然」字も用いることができる。煞脚（末尾）には「乎」字・「哉」字・「耳」字・「耶」字を用う。「也哉」・「者哉」・「焉」・「耳」・「乎」・「哉」・「者」・「耶」などは、文勢から判断すべきである。拘泥するものではない、という。

[用例]

題目：學而時習之（『論語』學而）

學不已其功、而所學者熟矣^①／夫學固非一日之事也、時以習之、其功曷有已乎（學 其の功を
やめず、而して學ぶ所の者は熟せり／夫れ學は固より一日の事に非ざるなり、時に以て之を
習う、其の功 曷ぞ已むこと有らんや）

①『四書集注』論語・學而・「子曰學而時習之」条の朱注に「時時習之、則所學者熟、中心喜説、其

進自不能已矣（時時に之を習えば、則ち學ぶ所の者は熟して、中心 喜説し、其の進むは自から已む能わず）」。

〔破題上句：〕「時習」字を暗破す。〔破題下句：〕註に照らして一句に扣（触れる）す。

〔承題一句：〕正承なり。〔承題二句：〕正点す。〔承題三句：〕破〔題〕に應ず。

此れ是れ正破・正承なり（『初學玉玲瓏』不分卷・十一葉・「破題」条）。

題目：人不知而不愠（『論語』學而）

學非求名，不必愠人之不知也／夫不知而不愠者恒多也，而不愠焉，豈在人者^①而求之乎（學名を求めるに非ざれば、必ずしも人の知らざるを^{いきどお}愠らざるなり／夫れ知らずして愠らざる者は恒に多し、而して愠らず、豈に人に在る者に于いて之を求めんや）

①『四書集注』論語・學而・「子曰學而時習之」条の朱注に「尹氏曰、學在己。知不知在人。何愠之有（尹氏 曰く、學は己に在り。知る知らざるは人に在り。何の愠ること之れ有らん）」。

〔破題上句：〕題意。〔破題下句：〕「而」。

〔承題一句：〕反承なり。〔承題二句：〕正点す。〔承題三句：〕破〔題〕に應じて一句を^①收む。

此れ是れ正破・反承なり（『初學玉玲瓏』不分卷・十一葉・「破題」条）。

①收：『斯文規範』に「收は、歛（おさめる）なり」（『斯文規範』卷之六・二十葉・「一日反收」条）。

題目：其爲人也孝弟（『論語』學而）

賢者重孝弟，而思夫克盡之人焉／夫孝弟人之大端也，能孝弟焉，豈有愧于爲人乎（賢者は孝弟を重んじ、而して夫の克く盡すの人を思う／夫れ孝弟は人の大端なり、能く孝弟なり、豈に「人と爲り」を愧ずること有らんか）

〔破題上句：〕全旨を冒（総括）す。〔破題下句：〕題の「也」字の神に扣（触れる）す。

〔承題一句：〕先ず「孝弟」を承く。〔承題二句：〕正点す。〔承題三句：〕次に「爲」を收む。

此れ是れ正破・正承なり（『初學玉玲瓏』不分卷・十二葉・「破題」条）。

題目：君子務本（『論語』學而）

觀君子之所務，惟在于本而已／夫天下事莫不有其本也，君子務之，敢馳情于本之外哉（君子の務むる所を觀るに、惟だ「本」に在るのみ。／夫れ天下の事は其の「本」有らざるは莫きなり、君子 之に「務む」、敢て情を「本」の外に馳せんや）

〔破題上句：〕分破。〔破題下句：〕なし

〔承題一句：〕下を照らして先ず「本」字を承く。〔承題二句：〕次に「務」字を承く。〔承題三句：〕一句を足らす。

此れ是れ順破・倒承なり（『初學玉玲瓏』不分卷・十二葉・「破題」条）。

題目：爲人謀而不忠乎（『論語』學而）

爲謀當忠，大賢首以之自省焉／夫謀而不忠，負人乎，負身矣，曾子時首自省也有以哉（謀を爲して忠に当たるは、大賢 首に之を以て自省すればなり／夫れ謀りて忠ならず，人に負くや，身に負くなり，曾子 時に首に自省するや以有るかな）

[破題上句:] 反題正破なり。[破題下句:] 「省」字を照らし，「乎」字の意を破く。

[承題一句:] 反承なり。[承題二句:] なし。[承題三句:] 「●」字を改たむ。

此れ是れ正破・正承なり（『初學玉玲瓏』不分卷・十二葉・「破題」条）。

題目：道千乘之國（『論語』學而）

爲有國者，道非苟焉而已也／夫道國亦良難矣，況千乘之國乎，君人者可不慎所以道之乎（國を有つて爲す者は，道 苟にするに非ざるのみ／夫れ國を道むるは亦た良に難し，況んや千乗の國をや，人に君たる者は之を道むる所以を慎まざる可けんや）

[破題上句:] 本題なり。[破題下句:] 下を含む。

[承題一句:] 先ず「道」・「國」を承く。[承題二句:] 次に「千乗」を跌す。[承題三句:] 「道」字に扣（触れる）し，下を動かす。

此れ是れ下意を正含する破承なり（『初學玉玲瓏』不分卷・十二葉・「破題」条）。

題目：弟子（『論語』學而）

聖人念弟子，當顧名而思義焉／夫弟子必有弟子之事也，既爲弟子，而可不安于弟子乎（聖人 弟子を念うに，當に「名を顧みて義を思う」（『三國志』魏志・王昶傳）べし／夫れ弟子は必ず弟子の事有り，既に弟子と爲る，而して弟子に安んぜざる可けんや）

[破題上句:] 題面なり。[破題下句:] 下意を虚含す。

[承題一句:] 下に晋む。[承題二句:] 点題す。[承題三句:] 下文を反動す。

此れ是れ下意を虚含する破承なり（『初學玉玲瓏』不分卷・十二葉・「破題」条）。

題目：雖曰未學（『論語』學而）

以未學稱盡倫之人，亦姑聽之而已／夫倫之既盡而猶以未學小之乎，然即曰未學，不過在人之見耳（未だ學ばざるを以て盡倫（『荀子』解蔽に「聖也者，盡倫者也」）の人と稱す，亦た姑く之を聽すのみ／夫れ倫の既に盡くせば，而して猶お未だ學ばざるを以て之を小とするがごときか，然らば即ち「未だ學ばず」と曰うは，人の見に在るに過ぎざるのみ）

[破題上句:] 先ず「未學」を破く。[破題下句:] なし。

[承題一句:] 先ず下意を透（通過）す。[承題二句:] 題に還る。[承題三句:] 「吾必謂」を反逗す。

此れ是れ倒破・倒承なり（『初學玉玲瓏』不分卷・十二葉・「破題」条）。

①反逗:『斯文規範』に「逗は、挑逗(さそいだす)なり。字面の未だ出でざるの先に於いて反筆を用い、以て題中の字面を挑逗するを言うなり」(『斯文規範』卷之六・十六葉・「一曰挑逗」条)。

題目:主忠信(『論語』學而)

學責有主、惟居之以誠而已^①/夫忠信所以進德也、不忠不信則事皆僞矣、君子可勿主之乎(學の責めに主有り、惟だ之に居るに誠を以てするのみ/夫れ忠信は徳を進むる所以なり、忠ならず信ならざれば則ち事皆な僞なり、君子 之を主とする勿かる可きかな)

①『四書集注』論語・學而・「主忠信」条の朱注に「程子曰、人道惟忠信、不誠則無物(程子曰く、人道 惟だ忠信のみ、誠ならざれば則ち物無し)」。なお、この注について、胡斐才(字は蓉芝。福建龍門の人。諸生)の『四書撮言大全』(乾隆二十八年(一七六三)刊)では、「誠は全體を指して言う。忠信は人の力を用いる處を指して言う。忠信を得れば即ち是れ誠なり…」(『四書撮言大全』論語・卷一・十四葉・「主忠信」条)と補足説明する。

[破題上句:]「主」を明破す。[破題下句:]「忠」を暗破す。

[承題一句:]なし。[承題二句:]「主」字に反逗^①す。[承題三句:]「主」字を収め醒ます。此れ是れ順破・倒承なり(『初學玉玲瓏』不分卷・十三葉・「破題」条)。

①反逗:『斯文規範』に「逗は、迫(せまる)なり。字面の未だ出でざるの先に於いて反筆を用い、以て題中の字面に逼迫するを言うなり」(『斯文規範』卷之六・十五葉・「一曰反逗」条)。

題目:民德歸厚矣(『論語』學而)

德化于厚^①、民非無良也/夫德民之所自具者也、有以化之、而豈有不歸厚者哉(徳 厚きに化し、民 良無きに非ざるなり/夫れ徳は民の自ら具する所の者なり、以て之を化する有り、而して豈に厚きに歸せざる者有らんや)

①『四書集注』論語・學而・「民德歸厚矣」条の朱注に「民德歸厚、謂下民化之其德亦歸於厚(「民の徳 厚きに歸す」とは、下民の之に化すれば、其の徳も亦た厚きに歸すを謂う)」。

[破題上句:]本面なり。[破題下句:]一句を托す。

[承題一句:]先ず「歸」字を透(通過)し、原出の一筆なり。[承題二句:]上に跟^{したが}う。[承題三句:]「●」字を明点す。

此れ是れ正破・正承なり(『初學玉玲瓏』不分卷・十三葉・「破題」条)。

題目:夫子温良恭儉讓以得之(『論語』學而)

政有可得而聞者、徳容之感人深也/夫温良恭儉讓、夫子豈有心以求合哉、而政即以是得之抑何神歟(政に得て聞く可き者有るは、徳の容^①の人を感じしむるや深ければなり/夫れ温良恭儉讓、夫子 豈に心に以て合うを求むること有らんや、而して政 即ち是^{これ}(自分から政治の相談にあずかることを要求する)を以て之を得れば抑そも何の神ならんや)

①『四書集注』論語・學而・「夫子溫良恭儉讓以得之」条の朱注に「言夫子未嘗求之，但其德容如是。故時君敬信，自以其政，就而問之耳。非若他人必求之而後得也（言は夫子 未だ嘗て之を求めず，但だ其の德容 是の如し。故に時君 敬信して，自から其の政を以て，就きて之を問うのみ。他人の必ず之を求めて，而して後に得るが若きに非ざるなり）」。

②同上の朱注に「聖人過化存神之妙，未易窺測（聖人の「過化存神」（『孟子』盡心上）の妙は，未だ窺測し易からず）」。

[破題上句:] 「得」字を倒破す。[破題下句:] 「溫良」の項を暗破す。

[承題一句:] 明承なり。[承題二句:] 反●一句。[承題三句:] 「得」字を轉点す。

此れ是れ倒破・順承なり（『初學玉玲瓏』不分卷・十三葉・「破題」条）。

題目：不以禮節之（『論語』學而）

禮以節和，不然者失中矣／夫和因節而美也，節之可不以禮乎，奈之何，惟一于和乎（禮は節和を以てす，然らざる者は中を失う／夫れ和は節に因りて美なり，之を節するに以て禮せざる可けんや，之を奈何せん，惟だ和に①一なるか）

[破題上句:] 反題して正破す。[破題下句:] 正還す。

[承題一句:] 先ず「節之」を承く。[承題二句:] なし。[承題三句:] 上に②繖す。

此れ是れ先反後正の破承なり（『初學玉玲瓏』不分卷・十三葉・「破題」条）。

①截去された上文に「知和而和（和を知りて和す）」とあるのを踏まえる。

②先反後正：『斯文規範』に「股頭は是れ反にして，股尾は是れ正なるを言うなり」（『斯文規範』卷之三・十七葉・「一日先反後正」条）。

題目：因不失其親（『論語』學而）

慎于所因者，惟務得其人而已／夫因亦其偶然耳，能于親者而不失，豈獨偶然因之乎（因る所を慎しむ者は，惟だ其の人を得るを務むるのみ／夫れ「因」るとは亦た其れ偶然なるのみ，能く親しむ者に于いて失わず，豈れ獨り偶然に之に「因」らんか）

[破題上句:] 「因」字を明破す。[破題下句:] 「不失親」を暗破す。

[承題一句:] 明承なり。[承題二句:] なし。[承題三句:] 下の「可」字を吸（含ませる）す。

此れ是れ正破・正承なり（『初學玉玲瓏』不分卷・十三葉・「破題」条）。

①截去された下文に「亦可宗也（亦た宗とす可きなり）」とあるのを踏まえる。

題目：而慎于言（『論語』學而）

慎有與敏交飭者，君子又用其心于言矣／夫言易有餘①君子所慎在此，豈以事之既敏而遂放言乎（「慎」は「敏」と交々飭す者有り，君子 又た其の心を「言」に用う／夫れ「言」は餘り有り易し，君子の「慎」む所は此に在り，豈に事の既に「敏」なるを以て遂に「言」を放たんや）

①『四書集注』論語・學而・「君子食無求飽」条の朱注に「慎于言者，不敢盡其所有餘也（「言に慎しむ」とは，敢て其の餘り有る所を盡さざるなり）」。この注について，胡斐才の『四書撮言大全』（乾隆二十八年（一七六三）刊）では，「言は餘り有るに至り易し，故に須らく慎むべし」（『四書撮言大全』論語・卷一・二十二葉・「君子食無求飽」条）と補足説明する。

[破題上句:] 順破にして，「而」字の意を取る。[破題下句:] 「言」字を反破す。

[承題一句:] 反承なり。[承題二句:] 「真」字を正点す。[承題三句:] 上に^{したが}跟う。

此れ是れ正破・反承なり（『初學玉玲瓏』不分卷・十三葉・「破題」条）。

題目: 其斯之謂與（『論語』學而）

通斯之謂于詩，無不作未若觀矣^①/夫淇澳之詩非爲斯言也，而賜忽有悟焉，亦何在非未若之旨哉（「斯之謂」を詩に通じ，「未だ若からず」の觀（見解）を作さざるは無し/夫れ淇澳の詩は斯の言を爲すに非ざるなり，而して賜（子貢）は忽ち悟る有り，亦た何くに「未だ若からざる」の旨に非ざることらんや）

[破題上句:] 本面なり。[破題下句:] 上の「未若」を照らす。是題。

[承題一句:] 反承なり。[承題二句:] 正還す。[承題三句:] 破くなり。

此れ是れ正破・反承なり（『初學玉玲瓏』不分卷・十四葉・「破題」条）。

①截去された上文に「子曰，可也，未若貧而樂，富而好禮者也（子曰く，可なり也，未だ貧しくして樂しみ，富みて禮を好む者に^じ若かざるなり）」とある。

題目: 告諸往而知來者（『論語』學而）

知以告而即通，惟解人可索也/夫往者之告，固不料其有通于來也，賜能知之，非可與言詩者哉（「知」は「告」を以て即ち通ず，惟だ人の索むる可きを解するなり/夫れ「往」く者の「告」ぐるは，固より其の「來」に通づること有るを料らざるなり，賜（子貢）は能く之を知る，「^{とも}與に詩を言う可き」者に非ざるか）

[破題上句:] 本題なり。[破題下句:] 暗に上文を我（找：補足）す。

[承題一句:] 反承なり。[承題二句:] 正還なり。[承題三句:] 上を我（找：補足）す。

此れ是れ正破・反承なり（『初學玉玲瓏』不分卷・十四葉・「破題」条）。

題目: 而衆星共之（『論語』爲政）

星之共也不一，歸德之象也/夫衆星甚寥廓矣，即北辰亦豈有所望乎，其共之也，殆亦不介而孚者耳（星の^{むか}共うや一ならざるは，德に歸するの象なり/夫れ衆星は甚だ寥廓なり，即ち北辰も亦た豈に望む所有らんや，其れ之に^{むか}共うや，殆ど亦た介せずして孚（信服）する者なるのみ）

[破題上句:] 本題なり。[破題下句:] 倒して正意を我（找：補足）す。

[承題一句:] なし。[承題二句:] 翻するの一筆なり。[承題三句:] 「而」字の神を正点す。
此れ是れ正破・反承なり（『初學玉玲瓏』 不分卷・十四葉・「破題」条）。

題目: 詩三百（『論語』 爲政）

聖人欲人之善于讀詩，而先統舉其數焉/夫世之讀詩者，未見有三百也，而抑知三百之詩，正可舉以示人乎（聖人 人の詩を讀むに善ならしめんと欲し，先ず其の數を統舉す/夫れ世の詩を讀む者は，未だ三百有るを見ざるなり，而れども抑そも三百の詩を知れば，正に舉げ以て人に示す可きかな）

[破題上句:] 下意を虚言す。[破題下句:] 「三百」を暗破す。

[承題一句:] 明承なり。[承題二句:] 下意を反承す。[承題三句:] 轉点し，下意を正含す。

此れ是れ下を含むの破承なり（『初學玉玲瓏』 不分卷・十四葉・「破題」条）。

題目: 有恥且格（『論語』 爲政）

民不獨于有恥，德禮之應也神矣/夫民而有恥，較之無恥者爲進矣，乃且格焉非德禮之感，易克臻此（民 獨り「恥有る」に于いてのみならず「且つ格る」ということまで具わっているということは），「德」・「禮」の應ずることや神なり/夫れ民にして「恥有り」，之を恥無き者に較べれば進めりと爲す，乃ち「且つ格る」は，「德」・「禮」の感ずるに非れば，克く此に臻り易きや）

[破題上句:] 「且格」を暗破す。[破題下句:] 上を我（找：補足）す。

[承題一句:] 先ず「有恥」を承く。[承題二句:] 「恥」。^{ママ}[承題三句:] 次に「且格」を承く。

此れ是れ總破・分承なり（『初學玉玲瓏』 不分卷・十四葉・「破題」条）。

題目: 不踰矩（『論語』 爲政）

矩之自合，安而行之也/夫矩未有不踰者，而況無心于矩乎，子之不踰亦七十時中道之驗耳（矩の自から合すれば，「安んじて之を行なう」(朱注に「隨其心之所欲，而自不過於法度，安而行之，不勉而中也（其の心の欲する所に隨いて，自から法度に過たず，安んじて之を行ない，勉めずして中るなり)）」なり/夫れ矩の未だ踰えざる者有らざるなり，而して況や心に矩無きをや，子の踰えざるは亦た七十の時の道に中るの驗なるのみ）

[破題上句:] 「不踰」を暗破す。[破題下句:] 一句を足らす。

[承題一句:] 反承なり。[承題二句:] 上の「從心^①」を照す。正還す。[承題三句:] 「七十^②」に跟（したが）う。

此れ是れ暗破・明承なり（『初學玉玲瓏』 不分卷・十四葉・「破題」条）。

①截去された上文に「七十而從心所欲（七十にして心の欲する所に從えども）」とある。

②同上。

題目：孟孫問孝於我（『論語』爲政）

述問孝之人，意不在于問孝／夫問孝者多，何獨于孟孫之問孝而述之，意若曰問孝而出于孟孫則孝必有異耳（孝を問うの人を述ぶるも，意は孝を問うに在らず／夫れ孝を問う者は多し，何ぞ獨り〔その質問が〕孟孫（孟懿子）より孝を問うに于いて之を述ぶるや，意は若（かくのごと）く曰く，孝を問うも，孟孫（孟懿子）に出れば則ち孝は必ず異なり〔があるのに「親の命に違わないこと」だと誤解される恐れが〕有ればのみ）

〔破題上句：〕題面なり。〔破題下句：〕題意なり。

〔承題一句：〕●●承。〔承題二句：〕なし。〔承題三句：〕下の「無違^①」なり。

此れ是れ正破・反承なり（『初學玉玲瓏』不分卷・十五葉・「破題」条）。

①截去された下文に「子曰，無違（子　曰く，違うなし）」とある。

題目：是謂能養（『論語』爲政）

明所謂孝，若以養畢其能焉／夫養亦孝所不廢，乃詢其所謂止在于是，豈古之孝者不過能養而已乎（謂う所の孝を明らかにすれば，養うを以て其の能を畢^おうるが若きなり／夫れ養うも亦た孝の廢せざる所なり，〔しかし〕乃ち其の所謂ゆる止まりて是に在るを詢^とう，豈に古の孝なる者は能く養うに過ぎざるのみか）

〔破題上句：〕分破なり。〔破題下句：〕なし。

〔承題一句：〕承開の一筆なり。〔承題二句：〕轉点なり。〔承題三句：〕下を動かす。

此れ是れ分破・分承なり（『初學玉玲瓏』不分卷・十五葉・「破題」条）。

題目：亦足以發（『論語』爲政）

發明^①聖言者，滿其量而後已焉／夫夫子固無意于回之能發也，亦足以發，迴視不違之時殆何如（聖言を發明する者は，其の量を満し而して後に已む／夫れ夫子　固より回（顔回）の能く發するに意無きなり，「亦た以て發するに足る」は，「違わざる」の時を迴視するに殆ど何如と）

〔破題上句：〕「發」字を破く。〔破題下句：〕「足」を暗破す。

〔承題一句：〕●●。〔承題二句：〕正点す。〔承題三句：〕上を照らして下を●す。

此れ是れ正破・反承なり（『初學玉玲瓏』不分卷・十五葉・「破題」条）。

①朱注に「發，謂發明所言之理（發とは，言う所の理を發明するを謂う）」。

題目：可以爲師矣（『論語』爲政）

師之可爲，亦可于有所應也／甚矣，師固難爲者也，若學在我而應不窮，即爲師^①也，不早已信其可哉（師の爲^なる可きは，亦た應ずる所有るに于いて可なるなり／甚しきや，師は固より爲^なり難き者なり，若し學の我に在りて應じて窮まらざれば，即ち師と爲^なるなり，早已に其の可^{つと}

なるを信とせざらんや)

①『四書集注』論語・爲政・「温故知新」条の朱注に「言學能時習舊聞而每有新得、則所學在我而其應不窮、故可以爲人師(言は學んで能く時に舊聞を習いて毎に新得有れば、則ち學ぶ所は我に在りて、其の應 窮まらず、故に以て人の師と爲る可し)」。

[破題上句:] 本面なり。[破題下句:] 暗に上意を我(找:補足)す。

[承題一句:] 反承なり。[承題二句:] 倒して上文を我(找:補足)す。[承題三句:] 題を醒ます。

此れ是れ正破・反承なり(『初學玉玲瓏』不分卷・十五葉・「破題」条)。

題目: 先行其言(『論語』爲政)

行爲君子之所重、有勵于未言之先者矣/夫君子非無言也、行其所言而以是爲先、寧第以言重乎哉(「行」は君子の重んずる所と爲り、未だ言わざるの先に勵む者有り/夫れ君子は「言」無きに非ざるなり、其の言う所を行ない、是を以て「先」と爲す、寧に第だ「言」を以て重んぜんや)

[破題上句:] 分破なり。[破題下句:] 下を含む。

[承題一句:] 先ず下を注す。[承題二句:] 題に還る。[承題三句:] 一句を收む。

此れ是れ分破・分承なり(『初學玉玲瓏』不分卷・十五葉・「破題」条)。

題目: 是知也(『論語』爲政)

指眞知之所在可于是者求之矣/夫知亦貴求其是者耳、本之于心能無自欺焉、而知豈外是乎(眞「知」の在る所を指し、「是」なる者に于いて之を求む可し/夫れ「知る」は亦た其の「是」なる者を求むるを貴ぶのみ、之を心に本づけて能く自から欺むくこと無し、「知る」とは豈に是れより外ならんや)

[破題上句:] 本面なり。[破題下句:] 一句に扣(触れる)す。

[承題一句:] 本を正すなり。[承題二句:] 上に照す。[承題三句:] なし。

此れ是れ分破・總承なり(『初學玉玲瓏』不分卷・十五葉・「破題」条)。

(iii) 『初學啓悟集』²⁾

『幼童舉業啓悟集』(乾隆十一年〔一七四六〕汪承忠自序・道光二十年〔一八四〇〕序)では、承題をつぎのように解説する。

……承題とは、破題の未だ盡さざるの意を承けて發明する者なり。……凡そ承題を做すに、其の格 三四句を以て正と爲す。五六句に至れば則ち長し。點逗(書き方)は最も明快・斬截(はっきりと明白)なるを要す。首句は是れ題の界限(範圍)なれば、須らく本題より説き起こすべし。即し上文を撒ち難き者有れば、亦た須らく先ず本題を承けて上文を倒

入すべし。方に題位（題目の要求）をして亂れざらしむ。且つ承題と破題とは斷じて相い應ずるを要す。如し順破なれば則ち逆承を用い、逆破なれば則ち順承を用い、分破なれば則ち合承を用い、合破なれば則ち分承を用い、正破なれば則ち反承を用い、反破なれば則ち正承を用う。凡そ首句の起頭の虚字は、宜しく「夫」字・「蓋」字を用う。「甚矣」字の若きは、用いる可しと雖も、却って常には用いず。而して末句の住脚には多く「耶」・「歟」・「乎」・「哉」等の字を用う。其の調べ高くして韻崎きなるを以てなり。其の餘の「矣」字・「也」字・「耳」字は、亦た皆な之を用う。尚お「之」字・「云」字・「如此」字を用いる有り。佳き者は、俱に文に臨むの時に斟酌す。○承題は最も「平頭」・「並脚」を忌く。「平頭」とは、領頭の數字と破題の領頭の數字とを相い同じくするなり。「並脚」とは、煞尾（末尾）の數字と破題の煞尾（末尾）の數字とを相い同じくするなり。破題は聖賢・帝王・諸人に於いて須らく破講を用うべし。承題は則ち之を直言す。如し堯・舜なれば、直ちに堯・舜と稱し、孔子なれば則ち直ちに夫子と稱す。此の外の諸人は、皆な題に依りて直稱し、復た避忌無し。又た夫子は単に「子」と稱し、顔子は単に「回」と稱し、曾子は単に「参」と稱す。諸々の此の如き類は、皆な其の簡捷を取るなり（『幼童舉業啓悟集』初集・法四葉～法五葉・「破承題法」条）。

①歟：「乎」字と同義なり。然れども「乎」字は軽く、「歟」字は穩らかなり。「乎」字は疑いて未だ定まらず。「歟」字は則ち疑いて而れども疑わざる者の在る有り。「其斯之謂歟」(『論語』季氏)・「君子人歟」(『論語』泰伯)の類の如し(『舉業辨字』歇語辭第七・三十五葉・「歟」条)。

②也：平落の辭なり。凡そ文字の平々と落下し、高さ太はだ揚がらず、低さ太はだ煞らざる者は、

- ✓ 2) 光緒十四年（一八八八）重鐫『初學啟悟集（封面書名は「増註啟悟集」とする）』（乾隆十一年〔一七四六〕汪承忠自序・嘉慶二十一年（一八一六）黃品南序）は、黃品南（餘姚の人）が詮解を行なっており、文字の異同がある。その「承題」条は、つぎのようになっている。

凡そ承題を做すに、其の格 三四句を以て正と為す。五六句に至れば則ち長し。點逗(書き方)は最も明快・斬截(はっきりと明白)なるを要す。首句は是れ題の界限(範圍)なれば、須らく本題より説き起こすべし。即し上文を撒し難き者有れば、亦た須らく先ず本題を承けて上文を倒入すべし。[そうすれば]方に題位をして亂れざらしむ。末句も亦た是れ題の界限(範圍)なれば、須らく本題より説き住むべし。即し下文を割り難き者有れば、亦た須らく本題を扣(触れる)定し、下文を吸動すべし。[そうすれば]方に題位をして溢れざらしむ。蓋し地位(位置)を緊守すれば則ち題の起訖(はじめと終り)は方に清きなり。且つ承題と破題とは斷じて相い應ずるを要す。如し順破なれば則ち逆承を用い、逆破なれば則ち順承を用い、分破なれば則ち合承を用い、合破なれば則ち分承を用い、正破なれば則ち反承を用い、反破なれば則ち正承を用う。文に變化有りて意は則ち一串(ひとつならなり)なり。首句の開頭の虚字に至れば、宜しく「夫」字・「蓋」字を用う。「甚矣」字の若きは、用いる可しと雖も、卻って常には用いず。而して末句の住脚の虚字は多く「耶」・「歟」・「乎」・「哉」等の字を用う。其の調べ高くして韻響なるを以てなり。其の餘の「矣」字・「也」字・「耳」字は、亦た皆な之を用う。尚お「之」字・「云」字・「如此」字を用いる有り。佳き者には、更に虚字の佳き者を用いざる有り。俱に文に臨む時に斟酌す。又た承題は最も「平頭」・「並脚」を忌む。「平頭」とは、領頭の數字と破題の領頭の數字とを相い同じくするなり。「並脚」とは、煞尾(末尾)の數字と破題の煞尾(末尾)の數字とを相い同じくするなり。此の二病 必ず染まる可からず(『初學啟悟集（封面書名は「増註啟悟集」とある）』卷一・二葉)。

之を用う。又た一句中の半落して復た起こる者も亦た之を用う。「可也簡」(『論語』雍也)・「赤也惑」(『論語』先進)の類の如し(『舉業辨字』歇語辭第七・三十二葉・「也」条)。

③之：『舉業辨字』に、

此の字は取用 甚だ衆し。故に其の義 一ならず。學ぶ者は、辨ぜざる可からざるなり。

或いは「的」字の解に作る。「大學之道」(『大學』經)・「天命之性」(『中庸』)・「禹之聲」(『孟子』盡心下)の類の如し。

或いは「於」字の解に作る。「之其所親愛」(『大學』傳第八章)「往送之門」(『孟子』滕文公下)の類の如し。

或いは「往」字の解に作る。「子之武城」(『論語』陽貨)・「自楚之滕」(『孟子』滕文公上)・「牛何之」(『孟子』梁惠王上)・「有司未知所之」(『孟子』梁惠王下)の類の如し。

或いは人を指して言う。「門人厚葬之指顔淵」(『論語』先進)・「富之・教之指衛民」(『論語』子路)・「知而仲(使)之指管叔」(『孟子』公孫丑下)・「不授者殺之指毫民」(『孟子』滕文公下)の類の如し。

或いは理を指して言う。「知者過之」(『中庸』第四章)・「博學之」(『中庸』第二十章)・「知之者」(『論語』季氏)・「為之難」(『論語』顔淵)・「予一以貫之」(『論語』衛靈公)の類の如し。

或いは事を指して言う。「左丘明恥之指巧言令色足恭」(『論語』公冶長)・「裨諶草創指為命」(『論語』憲問)・「為之猶賢乎已指博奕」(『論語』陽貨)・「四方來觀指葬事」(『孟子』滕文公上)の類の如し。

或いは物を指して言う。「王曰舍之指牛」(『孟子』梁惠王上)・「匠人斲而小之指大本」(『孟子』梁惠王下)・「殺而奪之指酒食」(『孟子』滕文公下)・「又從而招之指放豚」(『孟子』盡心下)・「館人求之弗得指●」(『孟子』盡心下)の類の如し(『舉業辨字』觀語辭第四・二十二葉～二十三葉・「之」条)。

とある。

④云：猶お説くがごときなり。句末に之を押む。大意は此の如く説話すと謂うなり(『舉業辨字』歇語辭第七・三十四葉・「云」条)。

⑤如此：直ちに上文を指し、將に後に之を説く有らんとするの辭なり。「如此然後可以為民父母」(『孟子』梁惠王下)・「如此則無敵於天下」(『孟子』公孫丑上)の類の如し(『舉業辨字』接語辭第二・八葉・「如此」条)。

承題は、破題で説きつくせないところを説明する部分である。承題は、三四句を正式なものとする。五六句では長くなる。書き方は明確ではっきりしていることが必要である。承題の第一句目は、題目の範囲を示すところにあたるので、題目の主題から説き始める。もしも題目となっていない題目より上の部分を切り離しにくければ、主題にもとづいてその上の部分に言及すべきである。題位(題目で要求されている内容)を乱してはいけない。そのうえ、破題と承題とはおたがいに呼応することが求められる。順破であれば逆承を用い、逆破であれば順承を用い、分破であれば合承を用い、合破であれば分承を用い、正破であれば反承を用い、反破であれば正承を用いる。承題の第一句目の頭の虚字には、「夫」字・「盖」字を用いる。「甚矣」字は、

用いることができるが、常には用いない。末句の最後には「耶」・「歟」・「乎」・「哉」等の字を用いることが多い。その調子が高く、韻も調子がいいためである。また「之」字・「云」字・「如此」字を用いることもある。すぐれた文章は、文を書く時にこうした文字を斟酌して用いている。承題は、「平頭」と「並脚」とを避ける。「平頭」とは、承題の第一句目の最初のいくつかの文字と破題の第一句目の最初のいくつかの文字とを同じものにしてしまうことである。「並脚」とは末句のいくつかの文字と破題の末句のいくつかの文字とを同じものにしてしまうことである³⁾。破題では、聖賢・帝王・諸人などは代字を用いるが、承題ではそのまま表現して避けることはしない。ただ、孔子は簡単に「子」と、顔回は「回」と、曾子は「参」と称するのは単に簡便であるからである、という。

以下の用例についてであるが、光緒十四年（一八八八）重鐫『初學啟悟集（封面書名は「増註啟悟集」とする）』は、『幼童舉業啟悟集』（乾隆十一年〔一七四六〕汪承忠自序・道光二十年〔一八四〇〕序）で挙げられる用例を取捨選択し、取り上げた用例に、黃品南が解説を行なっている。そこで、拙稿では、『幼童舉業啟悟集』で挙げられる用例をすべて示し、『初學啟悟集』で取り上げられ、黃品南の解説があるものについては、その解説も紹介する。

[用例]

題目：有朋自遠方來（『論語』學而）

朋自遠來，學之所及者廣矣／夫朋未易言來也，況遠方乎，若有自遠方來者，學之及人不已廣哉（朋遠きより來る，學の及ぶ所の者は廣し／夫れ朋未だ來ると言い易からざるなり，況んや遠方をや，若し遠方より來る者有れば，學の人に及ぶこと已に廣からざらんや）

[破題上句:] 題面を明破す。[破題下句:] 「李（學）」字に^{したが}跟いて一句を斷つ。

[承題一句:] 反承なり。[承題二句:] 二句[目は] 層次有り。「有」字を誦出す。題句を正点す[承題三句:] 破題に應じて収（收）む。

[頭注:] 亦た摠（摠[總]）破法なり（『幼童舉業啟悟集』初集・一葉）。

上節は是れ已を成す。本節は是れ物を成す。必ず已を成して，方めて物を成す可し。故に須らく「學」字を^ま須ちて説く。朋は師友を兼ね。我 已に先に覺せば，則ち師と爲る可し。彼 亦た先に覺せば，則ち友と爲る可し。故に題は「友」と言わずして「朋」と言う。遠方より來れば，則ち「善を以て人に及び，信從する者衆し」（朱注に「程氏曰，

3) 唐彪の『讀書作文譜』卷九・五葉・「承題」条によれば、「平頭」と「並脚」とはつぎのように解説される。承題の最も忌くる者は、平頭・並脚なり。平頭とは、[承題の] 領頭の數字と破題の領頭の數字と相い同じきなり。破題の領頭に「聖人」を用い、承題の領頭にも亦た「聖人」を用うが如き、是れなり。並脚とは、煞尾（末尾）の數字と破題の煞尾の數字とが相い同じきなり。破題の煞尾に「而已」字を用い、承題の煞尾に亦た「而已」字を用うが如き、是れなり……（『讀書作文譜』卷九・五葉・「承題」条）。

以善及人，而信從者衆，故可樂（程氏曰く、善を以て人に及ぼし、信從する者衆し、故に楽しむ可し）。故に「廣」と曰う。「廣」字は本題に扣（触れる）す。即ち下文の「樂」字意を吸（含ませる）す。又た正破なれば反承す。文法も亦た合す（『初學啟悟集』卷一・三葉・「有朋自遠方來」条）。

題目：吾日三省吾身（『論語』學而）

大賢省身之學，有與日俱勉者也^①。夫身不可不省也，曾子曰三省之，其自治之誠^②不可想見乎（大賢の身を省みるの學は、日と俱に勉むる者有るなり/夫れ身は省みざる可からざるなり、曾子は「日に三つ之を省みる」、其の自から治むるの誠 想見する可からざらんや）

①②『四書集注』論語・學而・「曾子曰吾日三省吾身」条の朱注に「曾子以此三者（「忠」・「信」・「傳不習」）日省其身，有則改之，無則加勉。其自治誠切如之，可謂得爲學之本矣（曾子此の三者（「忠」・「信」・「傳不習」）を以て日々其の身を省みる，有れば則ち之を改め，無ければ則ち勉を加う。其の自から治むるの誠切なること之の如し，學を爲すの本を得と謂う可し）」。

[破題上句・下句:] 二句は逆破なり，亦た是れ分破なり。

[承題一句:] 「省」・「身」を正承して一筆す。[承題二句:] 「日三」二字を轉出す。[承題三句:] 二句もて断収（收）す。

[頭注:] 題の字を点し，上句の「身」字を頂く（『幼童舉業啟悟集』初集・一葉～二葉）。

曾子の學の重んずる所は身に在り。下文の「忠」・「信」・「傳不習」は，皆な身に本づくより來る。即ち後に「戰兢」章（泰伯）と『孟子』の「守身爲太」（離婁上）は皆な是れ身を重んず。文は，先ず「身」を提出し，甚だ題旨を得。惟だ「身」を重んず，故に必ず日々（三？）省みる。破承の意 甚だ融洽し，遂に破[題]中の「勉」字より，[承題]の「自治之誠」を斷出す。皆な註に本づき文を作る。先ず書（本文）を體し，次に註を體す。初學の準繩なり（『初學啟悟集』卷一・三葉・「吾日三省吾身」条）。

題目：節用而愛人（『論語』學而）

用與人爲國之所重，當更道之以節愛焉/夫非用則國無所資，非人則國無以立，節焉愛焉，何莫非道國之要乎（「用」と「人」とは國の重んずる所と爲せば，當に更に之を道^{おさ}むるに「節」・「愛」を以てすべし/夫れ「用」に非ざれば則ち國 資する所無く，「人」に非ざれば則ち國以て立つ無し，焉^{これ}を節^{これ}し焉^{これ}を愛す，何ぞ國を道^{おさ}むるの要に非ざる莫けんや）

[破題上句下句:] 二句もて分破す。上の「過^{ママ}（道）」字に跟う。

[承題一句・二句:] 二句もて題の「用」字・「人」字を破^{ママ}（承）く。

[承題三句:] 「節」・「愛」二字を正点す。章旨を点して収（收）む。

[頭注:] なし（『幼童舉業啟悟集』初集・一葉）。

此の章は、「敬信」・「節」・「愛」・「時」・「使」の五項 並びに重んず。故に此の題 必ずしも「敬信」のみを頂かず。但だ皆な治國の要と爲す。故に當に「道」字を頂くべし。「節」・「愛」並びに重し、「而」字は是れ下語を體するなり、下語を注するに非ず。「用」と「人」とは須らく「國」に切なるべし。「節」と「愛」とは須らく「道」に切なるべし。破・承の開合 法有り。重要なる字に歸し、題旨 甚だ清し(『初學啟悟集』卷一・三葉～四葉・「節用而愛人」条)。

題目：而親仁(『論語』學而)

人有異於衆者，非徒汎愛而已也／夫仁固非衆比，不與之親則曰遠乎仁矣，教弟子者安可不使之親哉(人の衆に異なり有り者は、徒に汎く愛する非ざるなり／夫れ仁は固より衆[人]の比に非ず、之れと親づかざれば則ち「仁に遠ざかる」と曰う、弟子に教うる者は安くんぞ之をして親づかしめざる可けんや)

[破題上句:]「仁」字を暗破す。[破題下句:] 上句を帶びて、「親」字の意を破く。

[承題一句:] 先ず「仁」字を正承し、次に「親」字に及ぶ。[承題二句:] なし。[承題三句:] 章旨を点し、「親」字に正還(還)す。

[頭注:]「與之」字は、上句の「仁」字を頂く。「使之」の字は、上句の「弟子」を頂く(『幼童舉業啟悟集』初集・一葉)。

此の章の「孝」・「弟」・「謹」・「信」・「親」・「愛」は、先ず行を説き、後に文を説く。但だ「孝」・「弟」は項を同じくし、「謹」・「信」は項を同じくし、「親」・「愛」は項を同じくするなり。「親仁」と「愛衆」は離開し説くからず。蓋し「仁」は即ち衆中の孝弟なり。「謹」・「信」とは、宜しく「愛」に較べて「親」を加うべし。故に[一]個の「而」字に着く。又た此の章の三つの「則」字は是れ急皇の意なり。二つの「而」字は是れ詳愼の意なり。「仁」を「衆」に別にし、「愛」を較べ「親」を加え、何等詳愼ならん。若し「仁」字を泛説すれば、便ち「弟子」に切ならず。文 眞切を貴べば即ち此れ推す可し(『初學啟悟集』卷一・四葉・「而親仁」条)。

題目：就有道而正焉(『論語』學而)

以就正觀君子，其心爲至虛矣／夫有道者，言行之準也，君子就而正之，其心不有至虛者乎(「就」き「正」すを以て君子を觀れば、其の心 至虚と爲す／夫れ「有道」とは、言行の準なり、君子「就」きて之を「正」せば、其の心 至虚有らざるものならんや)

[破題上句・下句:] 明破す。「正」字に就き、却って「有道」の意に跟^{したが}う。

[承題一句:]「有道」を正承す。上の「事」・「言」に跟(したが)い、「就」・「正」を点す。

[承題二句:] なし。[承題三句:] 断収(収)す。

[頭注:] 末句は是れ断法なり(『幼童舉業啟悟集』初集・一葉)。

「有道」は人に屬して説き、有道の儒を指す。「就」とは、身を以て之に暱（昵）近（親近）す。「正」は是れ活字（臨機応変の文字）なり。「言」・「事」の正しからざるを恐れ、「有道」もて之を正すを望むなり。題は須らく「言」・「事」を抱くべし、「正」字は方に着落有り。亦た須らく「君子」を抱くべし、「就」字は方に着落有り。上文の志は「安」・「飽」に在らず、「敏」・「慎」に在り。自らはとす可きに幾し。而して猶お敢えて自らはとせざれば、則ち其の心「至虚」と爲す。虚とは即ち亡ぶが若く、虚なるが若く、下の「好學」の意を含む。又た承題に「有道」を提出し、「言行之準」と爲す。故に「正に就きて其の心 虚と爲す」と曰う。是の文章は〔力〕 爭上流法なり、徒に上を抱くを工と爲さざるなり（『初學啓悟集』 卷一・四葉～五葉・「就有道而正焉」条）。

題目：貧而無諂（『論語』 學而）

貧易至於諂、而無諂者有是思矣 / 夫諂亦貧之常也、若貧而無諂、豈非能守其貧者乎（貧しうして諂うに至り易し、而らば諂う者は是の思い（「貧而無諂」）有る無し / 夫れ諂うは亦た貧の常なり、貧しうして諂うこと無きが若し、豈に能く其の貧しきを守る者に非ざるか）

①『四書集注』 論語・學而・「貧而無諂」条の朱注に「常人溺於貧富之中、而不知所以自守、故必有二者之病（「貧而諂」・「富而驕」）、無諂無驕、則知自守矣、而未能超于貧富之外也（常人 貧富の中に溺れ、自から守る所以を知らず、故に必ず二者の病（「貧而諂」・「富而驕」）有り、諂うこと無く驕ること無ければ、則ち自から守るを知る、而して未だ能く貧富の外に超ゆる能わざるなり）」。

〔破題上句・下句：〕 先ず一句を反破す。次に正面に轉入す。

〔承題一句：〕 反承なり。〔承題二句：〕 題句を正点す。〔承題三句：〕 断収（收）す。

〔頭注：〕 なし（『幼童舉業啓悟集』 初集・一葉）。

題目：攻乎異端（『論語』 爲政）

於不可攻者而攻之、其惑甚矣 / 夫異端也而可攻乎、而奈何有攻之者、其惑不已甚哉（攻む可からざる者に於いて之を攻む、其の惑 甚だしきなり / 夫れ異端なるや、攻む可けんや、而して奈何ぞ之を攻むる者有らん、其の惑 已に甚だしきならずや）

〔破題上句・下句：〕 「攻」字を明破す。「異端」を暗破す。一句を断つ。

〔承題一句：〕 虚反もて承を作る。〔承題二句：〕 「攻」字を正点して轉ず。〔承題三句：〕 なし。

〔頭注：〕 轉題するの處（處）の字は、上句の「異端」を頂く（『幼童舉業啓悟集』 初集・二葉）。

此の「攻」字は、攻金・攻木の攻の如し。故に註に「専ら治む」と訓ず。夫れ異端は攻む可からず。彼 何を以て之を攻めんや。蓋し其の心 聖道を以て美と爲さず、異端を以て尙ぶと爲す。因りて特に之を指して「惑」と曰う。惑えば則ち攻む。攻めば則ち惑うこと愈々甚だし。塗炭の中に坐して、其の汚れを覺らず、鮑魚の肆なるに入りて、其の臭を知らず。詎ぞ惑うに非ざらんや。此れに即して之を推せば、富貴聲華に惑えば則

ち學術 壞れ、功利●詐に惑えば則ち治術 壞れ、邪說誠行に惑えば則ち正經 紊れて大道 淪ぶ。其の弊 言うに勝う可けんや。「惑」字を指出し、多くの人を喚醒す。文の世道に功有る者は此の類 是れなり。或いは云う、惑侵して害を下す、豈に惑は是れ害の來因にして、害の實際に非ずを知るや。[しかし、これは] 尙お本題の●裏に屬す。此の處の界限は、毫釐に在るを辨ず(『初學啟悟集』卷一・五葉・「攻乎異端」条)。

題目：孝慈則忠(『論語』爲政)

有不待使而忠者、問諸身而已足矣/夫孝也慈也、豈以邀民、而民之忠應之何待使爲哉(使むるを待たずして忠なる者有り、諸を身に問いて已に足れり/夫れ孝なり慈なり、豈に以て民に邀めんや、而して[孝慈であればおのずと]民の忠 之に應ず、何ぞ使むるを待ちて為さんや)

[破題上句:]「使」字を對して「志」字を明破す。[破題下句:]「孝慈」意を暗破す。

[承題一句:]逆破・順承なり。[承題二句:]「忠」字を反跌す。[則忠]を正点す。[承題三句:]「使」字に對して収む。

[頭注:]なし(『幼童舉業啟悟集』初集・二葉)。

①反跌:『斯文規範』に「反と跌とは配と作す。則ち跌字は即ち落字の意なり。題中の字眼 一つの反する中より落出するを言うなり。下の「跌落」(『斯文規範』卷之六・十五葉・「一日跌落」条)と名を異にするも實を同じくす」(『斯文規範』卷之六・十六葉・「一日反跌」条)。

題目：子奚不為政(『論語』爲政)

疑聖人之不為政、未識聖心者也/盖夫子豈不故(『初學啟悟集』は「欲」に作る)為政者、或人疑其不為政、殆未識夫子之心哉(聖人の政を為さざるを疑うは、未だ聖心を識らざる者なり/盖し夫子 豈に故さらに政を為さざる者ならんや、或人 其の政を為さざるを疑う、殆ど未だ夫子の心を識らざるか)

[破題上句:] 題面を明破す。[破題下句:] 一句を断つ。

[承題一句:] 正承して一筆す。[承題二句:] 題面を正点す。[承題三句:] 断収(收)す。

[頭注:]なし(『幼童舉業啟悟集』初集・二葉)。

題目：子張問十世可知也(『論語』爲政)

賢者欲知來、約舉十世為問也/夫後世之事難知也、況十世乎、然聖如夫子宜知來矣、此子張所以問歟(賢者 來るを知らんと欲し、十世を約舉して問と為すなり/夫れ後世の事は知り難きなり、況んや十世をや、然れども聖なること夫子の如きは宜しく來るを知るべし、此れ子張の問う所以なるか)

[破題上句・下句:] 上句は題意を破く。下句は題面を破く。

[承題一句:] 先ず「後世」に従う。一^{ママ}華(世)もて再び十世を跌出するを知る可からず。[承題二句:] 「夫子」に就きて轉を作す。[承題三句:] 収(收)めて「子張問」の上(箇所)に到る。

[頭注:] なし(『幼童舉業啓悟集』初集・二葉)。

題目: 無勇也(『論語』爲政)

決言人之無勇, 以其不為所當為也/夫勇也者人之所恃以有為者也, 若既不為所當為, 尚得謂之為有勇乎(人の勇無しと決言するは, 其の當に為すべき所を為さざるを以てなり/夫れ勇なる者は人の恃む所にして以て為すこと有る者なり, 若し既に當に為すべき所を為さざれば, 尚お之を勇有りと為すと謂うを得んか)

[破題上句:] 題面を明破す。[破題下句:] 倒して上文を我(找: 補足)す。

[承題一句:] 截上なり。[承題二句:] 二句は「勇」字を正承す。[承題三句:] 上文に轉入し, 題面に合す。

[頭注:] 「謂之」の字は, 上の「不為所當為(當に為すべき所を為さず)」句を頂く(『幼童舉業啓悟集』初集・二葉)。

「勇」字は「爲」字に^{したが}跟う, 亦た「見」字に^{したが}跟う。義を見ざるは, 或いは是れ智ならず。見て為さざるは, 直ちに是れ勇無し。蓋し「勇」は是れ正氣, 「義」は是れ正理なり。正氣有りて方^{まさ}に能く正理に配す。『中庸』に云う「明強」(『中庸』には「明強」という語は見あたらない。ただし, 第十章の「子路問強(子路 強を問う)」で「強」について明らかにしている), 『孟子』に云う「剛大(公孫丑上に「敢問何謂浩然之氣。曰難言, 其爲氣也, 至大至剛, 以直養而無害, 則塞于天地之間)」)は, 皆な此れを指すなり。學者 多く委靡(氣力が無い)なること多く, ^{ひろ}宏く諸を他人に通^{これ}該し, 忠孝もて己が任と爲さず, 暴棄にして自から甘んず。[これで] 尚お豪傑と爲す可けんや。「也」字は決詞なり。本より勇有るも, 之れ無^{なげ}きを謂う。慨く可きなり(『初學啓悟集』卷一・五葉~六葉・「無勇也」条)。

題目: 我愛其禮(『論語』八佾)

聖人自明其愛, 維禮之意深矣/夫告朔之禮, 其所係者大也, 夫子之所愛在此, 何暇為餼羊惜哉(聖人 自から其の愛するを明らかにするは, 禮を維[持]するの意 深ければなり。/夫れ告朔の禮は, 其の係る所の者は大なり, 夫子の愛する所は此に在り, 何の暇ありて餼羊の為に惜しまんや)

[破題上句・下句:] 「愛」字を明破す。即ち「其礼」の意の内に在る有り。

[承題一句:] 此の句は「礼」字を承く。[承題二句:] 「愛」字を轉出す。題面を正点す。[承題三句:] 「餼羊」に照して収(收)む。

[頭注:] 破題の下句は是れ断法なり(『幼童舉業啓悟集』初集・二葉)。

其の羊は是れ告朔の羊なり。則ち其の禮は是れ告朔の禮なり。但だ其の禮は已に亡べり。係る所は羊に在り。夫子 之を愛し、幾希(幾んど希なる)を萬一に存せんと欲す。所謂ゆる維なり。維とは、持なり。此れを持して失わず、其の能く復するを冀うなり。蓋し告朔の禮は、天時を敬す・王命を尊ぶ・民事に勤む、係る所は甚だ大なり。故に夫子 之を愛す。題と上句とは呼應す。文中は順破・逆承なり。末句は上を我(找:補足)す。筆意 超絶なり(『初學啓悟集』卷一・六葉・「我愛其禮」条)。

題目: 儀封人(『論語』八佾)

賢人而隱於下僚、其地與官皆足誌也/夫儀為下邑而封人小吏也、魯論特誌之、蓋將以表封人之賢耳(賢人にして下僚に隱る、其れ地と官とは皆な誌すに足るなり/夫れ儀は下邑と為り、而して封人は小吏なり、魯論 特に之を誌す、蓋し將に以て封人の賢を表せんとするのみ)

[破題上句:] 此句は題意を暗破す。[破題下句:] 此句は題面を暗破す。

[承題一句:] 暗破・明承なり。[承題二句:] 題意を虚還(還)す。[承題三句:] 下を含む。

[頭注:] 上下の兩論もて『魯論』と為す。此の還(還)頭の如きは是れ事を記す。●の字は、題の「儀封人」を頂き承けて説く(『幼童舉業啓悟集』初集・三葉)。

題目: 好仁者無以尚之(『論語』里仁)

無所好于仁之外、專所好于仁之中者也/蓋仁本無尚、好仁而極之、無以尚則好之至矣、此好仁者之所以未見哉(仁を好む所の外無し、仁を好む所の中に専らなる者なり/蓋し仁は本より尚うる無し、「仁を好み」て之を極め、以て尚うる無ければ、則ち好むの至りなり、此れ「仁を好む者」の未だ見ざる所以なるかな)

[破題上句:] 題面を破く。[破題下句:] 題意を破く。

[承題一句:] 「仁」字に就きて先ず一層を托す、●●●題面を正点す。[承題二句:] なし。

[承題三句:] 上文を摠(摠[總])して収(收)む。

[頭注:] なし(『幼童舉業啓悟集』初集・三葉)。

題目: 父母在(『論語』里仁)

計及於親在之時、為人子所當念也/夫父母而在固人子之深幸也、計及于此、而敢或忘其在乎(計親在すの時に及ぶは、人の子の當に念うべき所と為すなり/夫れ父母にして在せば、固より人の子の深き幸いなり、計 此に及ぶ、而して敢て或いは其の在すを忘れんや)

[破題上句:] 題面を明破す。[破題下句:] 下の「不遠遊」の意を含む。

[承題一句・二句:] 二句(破題の上下句)を正承す。[承題二句:] 題意を暗還(還)す。

[承題三句:] 下を含む。

[頭注:]「此」字は、承題の首句を頂く(『幼童舉業啓悟集』初集・三葉)。

題目:斯焉取斯(『論語』公冶長)

慮賢者之無所取,正幸其有所取也/夫子賤固能取友以成斯德者也,夫子慮其焉取,非正幸其有所取乎(賢者の取る所無きを慮り,正に其の取る所有るを幸とするなり/夫れ子賤は固より能く友を取り以て斯の徳を成す者なり,夫子其の「焉んぞ取る」を慮る,正に其の取る所有るを幸とするに非ざるかな)

[破題上句:]題面を破く。[破題下句:]題面を領取す。

[承題一句:]反題正承なり。[承題二句:]題に扣(触れる)して一句を点す。[承題三句:]破題を照して収(收)む。

[頭注:]破題の「其」字は,[破題の]上[句]の「賢者」を頂き,点題す。収(收)句の「其」字に至れば,俱に上の「子賤」を頂く(『幼童舉業啓悟集』初集・三葉)。

題目:由也好勇過我(『論語』公冶長)七葉

賢者之好勇,聖人姑揚之焉/夫子路固好勇人也,夫子言其過我,殆姑揚之云爾(賢者の勇を好み,聖人姑く之を揚ぐ/夫れ子路固より勇を好むの人なり,夫子其れ「我に過ぎたり」と言うは,殆ど姑く之を揚ぐのみ)

[破題上句:]上句は「好勇」字を明破す。[破題下句:]下句は「過我」の意を暗破す。

[承題一句:]「好勇」を正承す。[承題二句:]「過我」を正点す。[承題三句:]一句を足らして収(收)む。

[頭注:] [破題の]二句は順破なり,亦た是れ分破なり(『幼童舉業啓悟集』初集・三葉)。

題目:其行己也恭(『論語』公冶長)

觀鄭大夫之行己,有合于君子之恭/夫恭以行己君子之道也,而子產有焉,其行己不已合於君子之道哉(鄭の大夫の己を行ふを觀るに,君子の恭に合う有り/夫れ恭以て己を行ふは君子の道なり,而して子產焉れ有り,其の己を行ふは已に君子の道に合わざるか)

[破題上句・下句:]二句もて先ず破「行己」を破き,次に上「君子」を我(伐:補足)して,「恭」字を破く。

[承題一句・二句:]二句もて「君子」を我(找:補足)し,承を作る。[承題三句:]上を我(找:補足)して収(收)む。

[頭注:]是れ順破なり,亦た是れ分破なり(『幼童舉業啓悟集』初集・三葉)。

題目:歸與歸與(『論語』公冶長)

聖人決計於歸,若有難忘於歸者也/夫夫子之初心本不欲歸也,而茲兩曰歸與,其意殆有難忘

者在耶（聖人 計を歸るに決するも、歸るを忘れ難き者有るが若きなり／夫れ夫子の初心は本より歸るを欲せざるなり、而して茲に兩つながら「歸與」と曰う、其の意は殆ど忘れ難き者（門人）の「魯に」在る有るか）

〔破題上句：〕 題面を明破す。〔破題下句：〕 下意を含む。

〔承題一句：〕 一句もて反承す。〔承題二句：〕 〔題〕 面を正点す。〔承題三句：〕 下を含む。

〔頭注：〕 「決計」は是れ兩個の「歸與」字よりするなり（『幼童舉業啓悟集』初集・四葉）。

題目：曰與之庾（『論語』雍也）

為請益者言與、若隱示以不當益之意矣／夫赤固無待于庾也、曰與之庾、殆為請益者婉示之乎（益すを請う者の為に「與えよ」と言うは、以て當に益すべからざるの意を隱示するが若し／夫れ赤（子華：公西赤）は固より庾（一石六斗）を待つ無きなり、「與之庾（之に庾を與えよ）」と曰うは、殆ど益すを請う者の為に之を婉示（遠まわしに示す）するか）

〔破題上句：〕 此句は上に^{したが}跟いて「與」字を明破す。〔破題下句：〕 下句は「庾」字を暗破す。

〔承題一句：〕 反承す。〔承題二句：〕 題句を比点す。〔承題三句：〕 上を果して収（收）む。

〔頭注：〕 なし（『幼童舉業啓悟集』初集・四葉）。

題目：以與爾隣里鄉黨乎（『論語』雍也）

廣賢者以可通之情、所以曲成其廉也／夫栗豈為隣里鄉黨設乎、而以與之也、亦曰此猶情之可通者耳（賢者の以て通ず可きの情を廣くするは、^{つぶ}曲さに其の廉を成す所以なり／夫れ栗は豈に隣里鄉黨の為に設けんや、而して「[余りがあるならば] 以て之に與ふ」とするなり、亦た此れ猶お情の通ず可き者と曰うのみ）

〔破題上句：〕 此句は題面を破く。〔破題下句：〕 此句は題意を破く。

〔承題一句：〕 承くるに虚法を用う。〔承題二句：〕 「以與」字を轉出す。〔承題三句：〕 正●。

〔頭注：〕 なし（『幼童舉業啓悟集』初集・四葉）。

上句の「母」字は是れ「常祿」なれば當に辭すべからざるとするなり。意 已に説き盡せり。何ぞ復た示すに「急を^{すく}周う」を以てするや。況や原思は本より富むに非ざるをや。但だ原思は貧に安んじて九百の粟を需めず。因りて辭するを致す。辭すれば則ち^{いつわ}矯りの廉と爲すあり。示すに「急を^{すく}周う」を以てするは、^{つぶ}曲さに其の廉を成す所以なり。「急を周う」と祿を辭するとを將^もつてす可からず。二意 並びに重し。蓋し「乎」字と「母」字とは緊なること相い呼應し、明示するに情の通ず可きを以てし、暗示するに義の背き難きを以てす。總じて其の粟を辭せざらんと欲せしむるなり。斯の文は、暗破・明承にして、收めて「乎」字に到る。神理 極めて得。承題の起處の「粟不爲隣里鄉黨設（粟は豈に隣里鄉黨の為に設けず）」は、暗に「常祿」に^{したが}跟う。故に收處は自明なるを我（找：補足）せず。先正 云う、題中の實字 重し、虚字は更に重し。此れに即きて推す

可し（『初學啓悟集』卷一・六葉～七葉・「以與爾隣里鄉黨乎」条）。

題目：善為我辭焉（『論語』雍也）

辭欲其善，示以不仕權門也／夫辭而不善不足以動大夫之聽也，閔子望使者之善辭，豈非不仕權門之意哉（辭するに其の「善」くせんことを欲す，以て權門に仕えざるを示すなり／夫れ辭して「善」くせざれば以て大夫の聽を動かすに足らざるなり，閔子 使者の「善く辭せん」ことを望む，豈に權門に仕えざるの意に非ざらんや）

〔破題上句：〕此句は題面を破く。〔破題下句：〕下句は題意を破く。

〔承題一句：〕反承なり。〔承題二句：〕二句は題句を正点す。〔承題三句：〕破題の内に應ず。

〔頭注：〕なし（『幼童舉業啓悟集』初集・四葉）。

題目：不如樂之者（『論語』雍也）

學至於樂，非好之者所能及也／夫樂乃學之極致也，人苟至於此，豈好之者所能及乎（學の樂しむに至るは，之を好む者の能く及ぶ所に非ざるなり／夫れ樂しむは乃ち學の極致なり，人苟し此に至れば，豈に之を好む者の能く及ぶ所ならんや）

〔破題上句：〕「樂」字を明破す。〔破題下句：〕次に上句を我（找：補足）して，下の「如」意を暗破す。

〔承題一句：〕「樂」字を正承す。〔承題二句：〕下の字に暗還（還）す。〔承題三句：〕破題に應じて収（收）む。

〔頭注：〕「此」字は，上句の「樂」字を頂く（『幼童舉業啓悟集』初集・四葉）。

題目：予所否者（『論語』雍也）

聖人動必由中，不勸自念其所否也／夫夫子固時中之聖而猶有否乎，其自念所否者，正所以曉子路耳（聖人の動は必ず中よりすれば，自から其の否き所を^{すまじ}念うを^{おも}勧めざるなり／夫れ夫子は固より時中の聖にして猶お否きもの有るや，其の自から否き所を^{すまじ}念う者は，正に子路に曉す所以なるのみ）

〔破題上句：〕題意を破く。〔破題下句：〕題面を破く。

〔承題一句：〕なし。〔承題二句：〕二句は反承なり。〔承題三句：〕題句を正点す。〔截去された題目の上の〕「子路不説」〔の部分〕を計りて収（收）む。

〔頭注：〕なし（『幼童舉業啓悟集』初集・四葉）。

題目：舉一隅不以三隅反（『論語』述而）

學貴能悟，不反者負所舉矣／夫三隅不出一隅之外也，舉一宜乎反三矣，若之何不以三隅反也，是豈為能悟者哉（學は能く悟るを貴ぶ，^①反せざる者は^{そむ}舉ぐる所に負けり／夫れ三隅は一隅の

外に出でざるなり、一を舉げ宜しく三を反すべきなり、之を若何ぞ「三隅を以て反せず」や、是れ豈に能く悟る者と為さんや)

①『四書集注』論語・述而・「不憤不啓」条の朱注に「反者、還以相證之義（反とは、還って以て相い證するの義なり）」。

[破題上句:] 上句は題意を破く。[破題下句:] 下句は題の如くし、反跌す。

[承題一句:] なし。[承題二句:] 二句は反題正承なり。[承題三句:] 題の如くして下句を点す。題意を反収（収）す。

[頭注:] なし（『幼童舉業啓悟集』初集・五葉）。

上の二句は是れ心 專ならず、此れ是れ理 悟らず。夫れ悟るは須らく質を美くすべし、豈に強いて求めんや。然れども精神 磨勵を以て生じ、義理は勤苦に由りて得。心 專なれば則ち理 自ら悟る。故に夫子 此の意を「憤らず」・「悱せず」の後に説く。況や理の相い隔たる者は通じ難く、理の相い肖たる者は會し易きをや。一隅・三隅は相い肖たる者なり。而れども盡く以て相い証する能わず。尙お再び告ぐ可きか。但だ題[目]は下句を載す。必須らく緊扣すべし。斯の文の破[題]は「悟」字を提し、「舉」字を扣（触れる）す。承[題]は「隅反」を點し、「不」字に轉到す。仍お「悟」を以て扣住す。題字 漏らさず、題位 溢れず。題旨 甚だ清なり（『初學啟悟集』卷一・七葉・「舉一隅不以三隅反」条）。

題目：不圖為樂之至於斯也（『論語』述而）

契韶之深者、知之而不能言焉/夫韶之為樂宜非夫子不能言也、不圖至斯之嘆、何明知之而竟莫能言乎（契韶の深き者は、之を知りて言う能わず/夫れ韶の^{がく}樂為るは宜しく、夫子に非ざれば言う能わざるなり、「不圖[爲樂之] 至斯（^{はか}圖らざりき^{がく}樂を爲すの^{こゝ}斯に至らんとは）」の嘆あり、何ぞ明かに之を知りて竟に能く言う莫けんや）

[破題上句・下句:] 二句 俱に題意を暗破す。

[承題一句:] 反なり。[承題二句:] 題句を正点す。[承題三句:] 破題に應じて収（収）む。

●句

[頭注:] なし（『幼童舉業啓悟集』初集・五葉）。

題目：女奚不曰（『論語』述而）

聖人不難以共信、因韶賢者以言焉/夫使誠無可以對人也、無為貴聖矣、韶由以言也、亦將期其共信焉耳（聖人 以て共に信じ難からざるも、韶に因り賢者 以て焉を言う/夫れ誠に以て人に對う^{こゝ}可きこと無からしむれば、聖を貴ぶと為す無し、韶もて由り以て言うや、亦た將に其の共に信ずるを期せんとするのみ）

[破題上句:] 此の句は下意を含む。[破題下句:] 此の句は題面を破く。

[承題一句:] 反承するの一句なり。[承題二句:] 題意に正還(還)す。[承題三句:] 下を含みて収(收)む。

[頭注:] なし(『幼童舉業啓悟集』初集・五葉)。

題目: 互郷(『論語』述而)

郷以互名, 若非為善於郷者也/夫魯地甚多, 何獨于互郷傳之, 非有所以傳之者耶([童子が]郷「互」を以て名いう, [その童子は]郷に善を為すに非ざるが若き者なり/夫れ魯の地は甚だ多し, 何ぞ獨り「互郷」に于いて之を傳えん, 之を傳うる所以の者有るに非ざらんや)

[破題上句:] 題面を明破す。[破題下句:] 下の「與言」意を含む。

[承題一句:] 開筆もて承を作る。[承題二句:] 含筆して点題す。[承題三句:] 下を含みて収(收)む。

[頭注:] なし(『幼童舉業啓悟集』初集・五葉)。

題目: 大哉堯之為君也(『論語』泰伯)

聖人賛古帝之為君, 而嘆想其大焉/夫古之為君者多矣, 而如堯之為君誠莫可及也, 此夫子所以嘆想其大乎(聖人 古帝の君為るを賛じ, 而して其の大なるを嘆想す/夫れ古の君為る者は多し, 而して堯の君為るが如きは誠に及ぶ可き莫きなり, 此れ夫子の其の大なるを嘆想する所以なるか)

[破題上句:] 題面を明破す。[破題下句:] 下意を虚捨す。

[承題一句:] 襯筆^①もて承を作る。[承題二句:] 轉出堯來。[承題三句:] 應破題次句収(收)。

[頭注:] なし(『幼童舉業啓悟集』初集・五葉)。

① 襯筆: 『初學題類文法合編』に「襯とは、彼の物を以て此の物を襯(際立たせる)するなり。題

日月を説けば、星辰の類を以て襯を作る。題[目] 河海を説けば、江淮の類を以て襯を作る。

高一層の襯する者有れば、低一層の襯する者有り。對面の襯する者有れば、側面の襯する者有り。

畫家の烘雲託月(雲を塗りつぶして月をはっきりさせるように、周りとの対照をきわだたせる)

が如き、是れなり」(『初學題類文法合編』下卷・一葉・「襯筆」条)。

題目: 進(『論語』子罕)

有奮于始者, 其進若未可量也/夫天下事孰不期于進, 而不意覆一簣者亦志于山也, 孰使之進耶(始めに奮する者有り, 其の進むや未だ量る可からざるが若きなり/夫れ天下の事孰^{たれ}が進むを期せざらん, 而して一簣を覆^{くつが}すを意わざる者も亦た山を志すなり, 孰^{たれ}が之をして進めしめん)

[破題上句:] 上句は題意を暗破す。[破題下句:] [下]句は「進」字を明破し, 下意を虚吸す。

[承題一句:] 承は寛筆を用う。[承題二句:] 上句に跌入し, 題意に暗還(還)す。[承題三句:]

下を吸（含ませる）す。

[頭注:] 此の字は、上句の「進」字を頂く（『幼童舉業啓悟集』初集・五葉）。

題目：法語之言（『論語』子罕）

言有以法語進者、義正而辭嚴矣／夫言而曰法語凜乎、其不可犯矣、以此責人不亦正且嚴哉（言に法語を以て進めし者有れば、義正しく而して辭嚴なり／夫れ言にして「法語」と曰うは凜なり、其れ犯す可からず、此れを以て人を責むるは亦た正にして且つ嚴ならずや）

[破題上句:] 題面を明破す。[破題下句:] 題意を正足す。

[承題一句・二句:] 二句は正承なり。題意に暗還（還）す。[承題三句:] 破題に應じて収（收）む。

[頭注:] 此の字は、承題の首句を頂く（『幼童舉業啓悟集』初集・六葉）。

師の弟に教えるに先ず「法言」を爲す。「法言」改めざれば、繼ぎて「異言（異與之言）」を以てす。祇だ此の二術は、「法言」先に在り。何ぞ「法語之言」と説くや。「語」と「言」とはかさな沓らざらんか。須らく「法語」は是れ成語なるを知るべし。文は當に傳うべし・禮は當に約なるべし・子は當に孝なるべし・臣は當に忠なるべしの類の如し。萬に易う可きも無し。故に敢えて従わざるにあらず。此れを以て弟子と言う、言う所の者は「法語」なり。但だ「之」字の神情は何れの解を作さん。「之」字は下の「能」・「無」・「乎」の三字に緊呼すれば、則ち「之」字の神情を知る。是れ義は正にして辭は嚴なるの意なり。若し「之」字の神情を窺破せず、但だ「法語」と言うをな倣せば、恐らくは題神 走作し、下句と針對せず。文は破・承の收處に於いて、嚴正の意を提出し、本題に緊切し、下句と針鋒して相い對す。凡そ載下題を作す者は、當に此れを奉じて法程と爲すべし（『初學啟悟集』卷一・七葉～八葉・「法語之言」条）。

題目：知者不惑（『論語』子罕憲問）

不為事物所惑、惟知者則然也／甚矣人之難免于惑也、若求其不惑者、其惟知者乎（事物の惑う所と為らざるは、惟だ知者のみ則ち然るなり／甚しきかな人の惑うを免れ難きや、若し其の惑わざる者を求めれば、其れ惟だ知者なるか）

[破題上句:] なし。[破題下句:] 二句は是れ逆破なり、亦た是れ分破なり。

[承題一句] 反句なり。[承題二句:] 「不惑」を正点す。[承題三句:] 「知者」を倒反す。

[頭注:] なし（『幼童舉業啓悟集』初集・六葉）。

題目：不撤薑食（『論語』鄉黨）

物有不撤者、可以觀聖人之養生矣／夫薑之為物甚微也、夫子食而不撤、不可以觀養生之道乎（物にす撤てざる者有り、以て聖人の養生を觀る可し／夫れ薑の物はじかみ為るや甚だ微なり、夫子 くら食い

て撤^すてず、以て養生の道を観る可からざんや)

[破題上句:] 上句は「薑」字を暗破す。[破題下句:] 「不撤」二字を明破す。

[承題一句] 「薑」字を明承す。[承題二句:] 「不撤」二字を点す。[承題三句:] 破に應じて収(收)む。

[頭注:] 破題の第二句は、節旨を照らす(『幼童舉業啓悟集』初集・六葉)。

題目: 居不容(『論語』郷黨)

記聖人之居、有不事于容者焉/夫居而容焉則已拘矣、夫子不然、此郷黨所以記之乎(聖人の居^おるを記すに、容^{かたち}づくるを事とせざる者有り/夫れ居^おりて容^{かたち}づくるは則ち已に拘するなり、夫子 然らず、此れ郷黨の之を記す所以なるか)

[破題上句:] なし。[破題下句:] 二句は是れ題●破、破亦た是れ分破なり。

[承題一句] 反承なり。[承題二句:] 二句は「不」字を正点す。[承題三句:] なし。

[頭注:] 収(收)句は是れ記事●(『幼童舉業啓悟集』初集・六葉)。

題目: 有盛饌(『論語』郷黨)

饌以盛、稱禮至隆也/夫饌雖薄亦所以明敬也、況其為盛焉者、其禮不至隆乎(饌するに盛を以てするは、禮の至隆なるを稱す/夫れ饌は薄きと雖も亦た敬を明らかにする所以なり、況んや其の盛と為す者をや、其の禮 至隆ならずや)

[破題上句:] 題面を明破す。[破題下句:] 注の「主人之礼」に照らす。

[承題一句] 「饌」に従いて「盛」字を反折す。[承題二句:] 一筆もて「盛」字を趺起す。[承題三句:] 層次有り、破は應じて承く。

[頭注:] なし(『幼童舉業啓悟集』初集・六葉)。

(つづく)